

フォトコンテスト参加前に 知っていただきたいこと

主催：あいちの米麦大豆消費拡大連盟



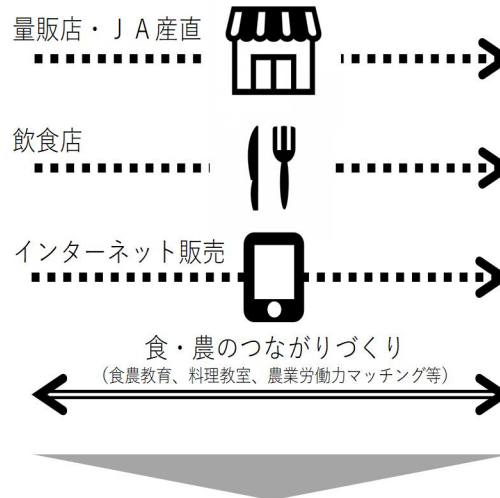
地産地消＝エシカル消費

地産地消とりわけ産直は、流通経路・収穫後消費者が手に取るまでの時間が短い。

だから

- ① **新鮮**（完熟に近い＝農産物本来の味、栄養価が低下していない、食味が良い）
- ② **フードマイレージが少ない**（CO2排出量が少ない）

つまり、**SDGsにも貢献するエシカル消費**



（写真はイメージ）



生産者と消費者の架け橋として、
県産県消、持続可能な地域農業の実現に貢献

フードマイレージとは

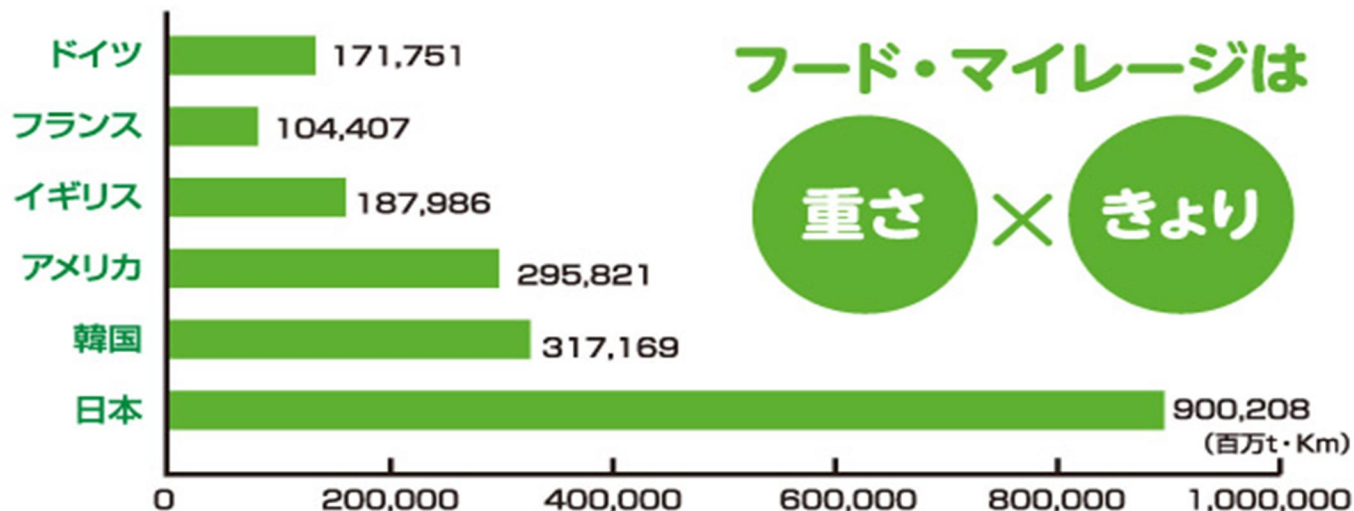
食料の輸送量と輸送距離を定量的に把握する指標のひとつ

【計算式】

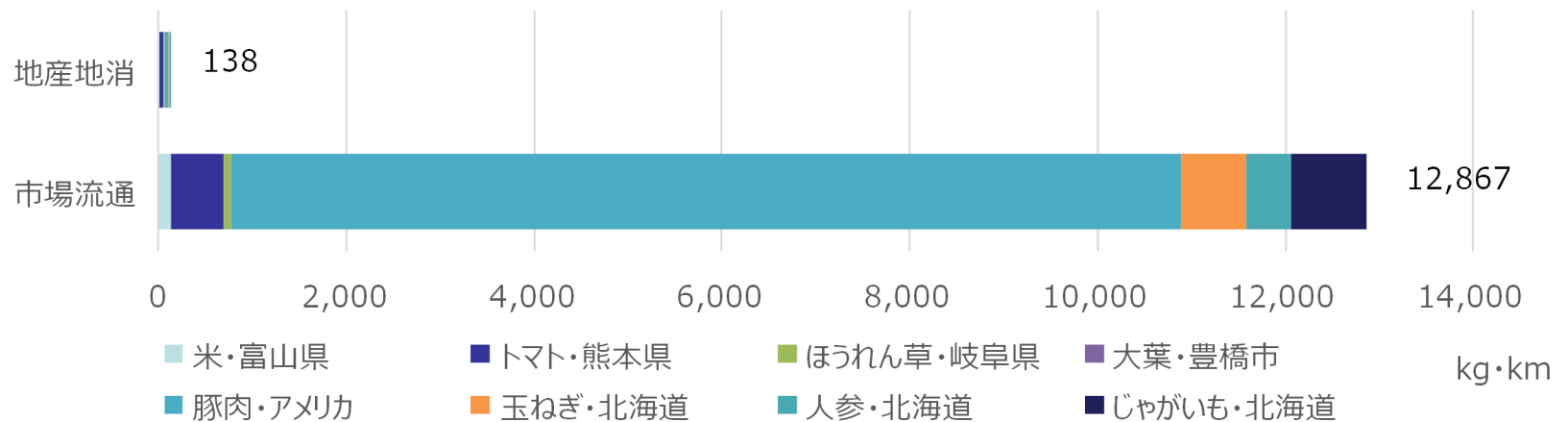
$$\text{フードマイレージ (t・km)} = \text{食料の重さ (t)} \times \text{輸送距離 (km)}$$

はじまりは、イギリスの「フード・マイルズ運動」

Food Miles（食料の量×輸送距離）を意識し
なるべく地域内で生産された食料を消費することで
環境負荷を低減させていこうという市民運動
（１９９４年に提唱された）



フードマイレージの試算



カレー 5皿分	地産地消 (県産県消)			市場流通		
主な食材	フード マイルージ	CO2 排出量(g)	試算した地域	フード マイルージ	CO2 排出量(g)	試算した地域
米	7.8	1.7	豊田市前林町	135.6	29.3	富山県砺波市
トマト	39.6	8.6	豊橋市	561.6	121.3	熊本県八代市
ほうれん草	21	4.5	飛島村	85.5	18.5	岐阜県高山市
大葉	0.345	0.1	豊橋市	0.345	0.1	豊橋市
豚肉	36	7.8	田原市	10,108.5	463.4	アメリカ アイオワ州
玉ねぎ	16	3.5	碧南市	698	150.8	北海道北見市
人参	12	2.6	碧南市	472.8	102.1	北海道富良野市
じゃがいも	5	1.1	豊田市藤岡町	805	173.9	北海道帯広市
合計	138	29.8		12,867	1059.3	

※例として愛知県豊田市でカレーを作る試算。フードマイルージを試算した地域は主な産地を仮定した。
市役所や直売所等から豊田市までの車の移動距離で計算。

二酸化炭素1キロは？

CO₂排出 1キロはどのくらい？



500mlペットボトル
約1,000本分の体積と同じ
くらい



自動車で3.6km走った時の
CO₂排出量と同じくらい
※自動車燃費を8.33km/Lとして計算



ドラム式洗濯乾燥機
洗濯～乾燥 1.3回分
※消費電力量890Wh
洗濯乾燥時間98分
(品番：NA-VX9500)



テレビを20時間見たのと
同じくらい
(32インチ液晶テレビ
消費電力98W)



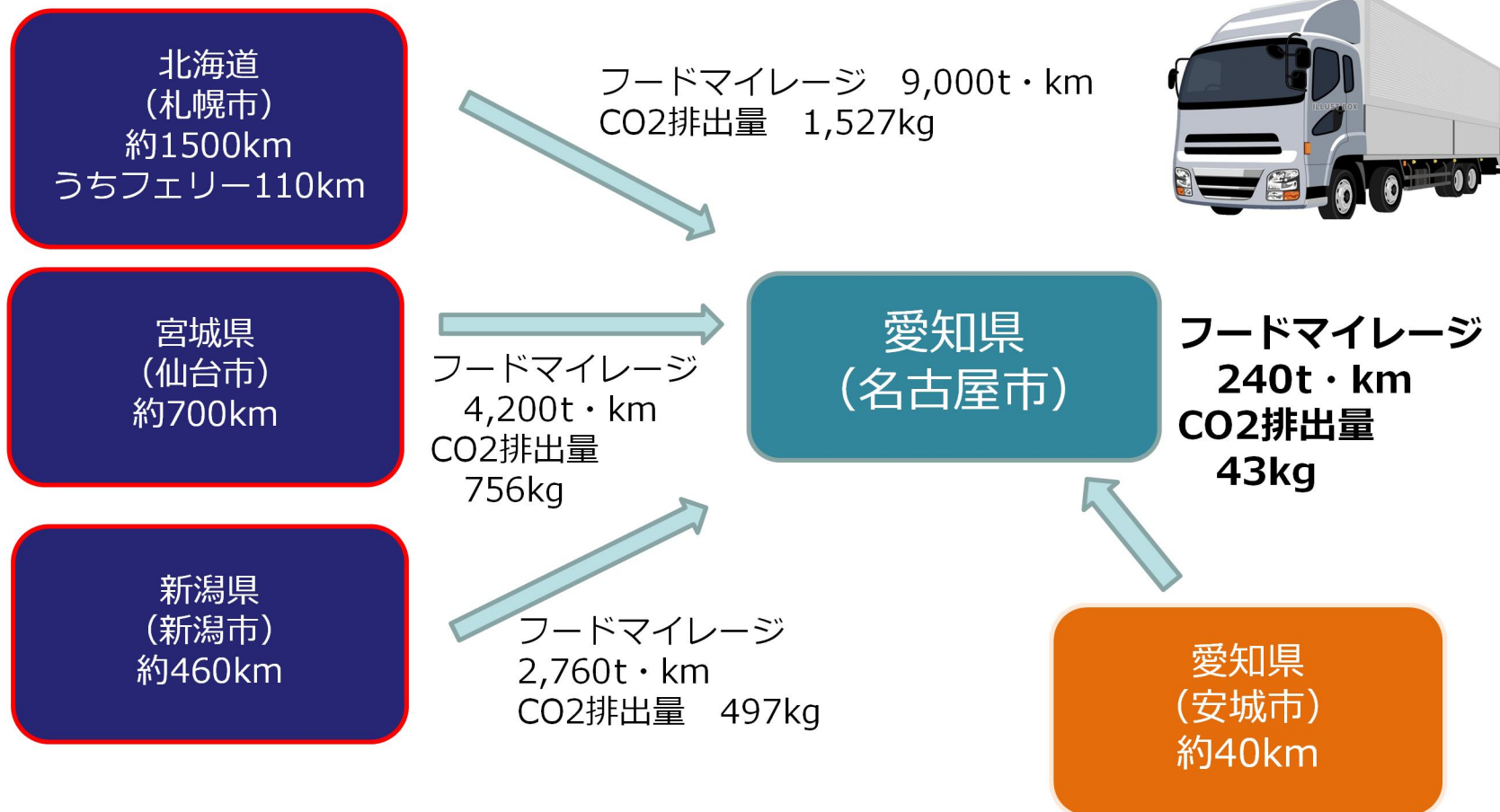
人間が1日に吐き出す
CO₂排出量と同じくらい
(出典：地球環境研究センター)



4人家族が使用する水道
約5日分
(1人あたり233L/日として計算)

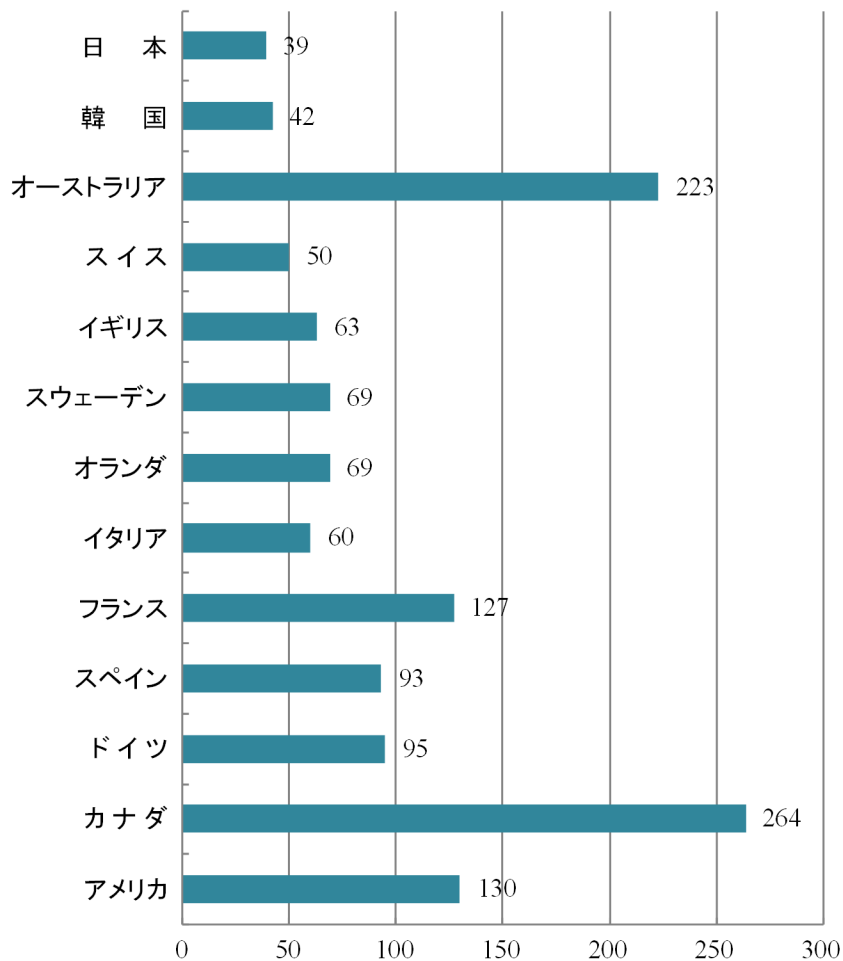
お米でよくあるケース

米を6ト（100俵）陸路（北海道は海路含む）で愛知県（名古屋市）へ搬入した場合のフードマイレージと輸送に係るCO2排出量

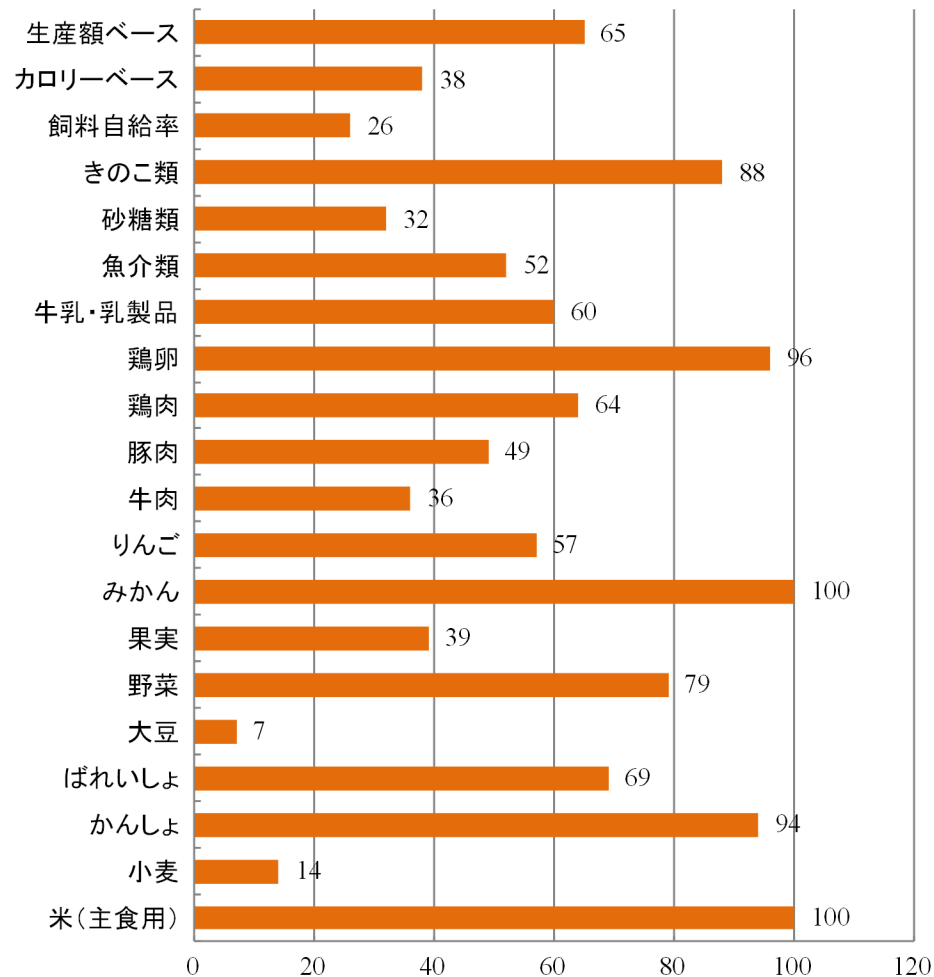


食料自給率

2013年_各国の食料自給率_カロリーベース

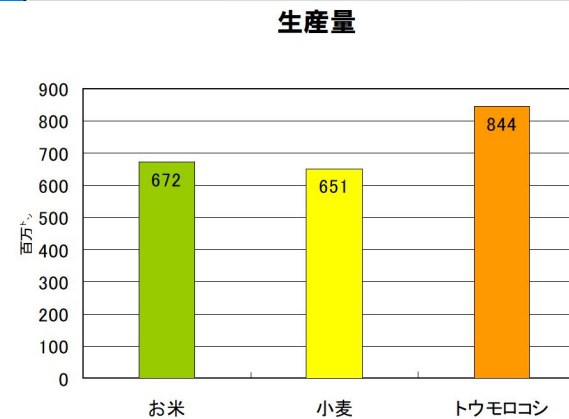
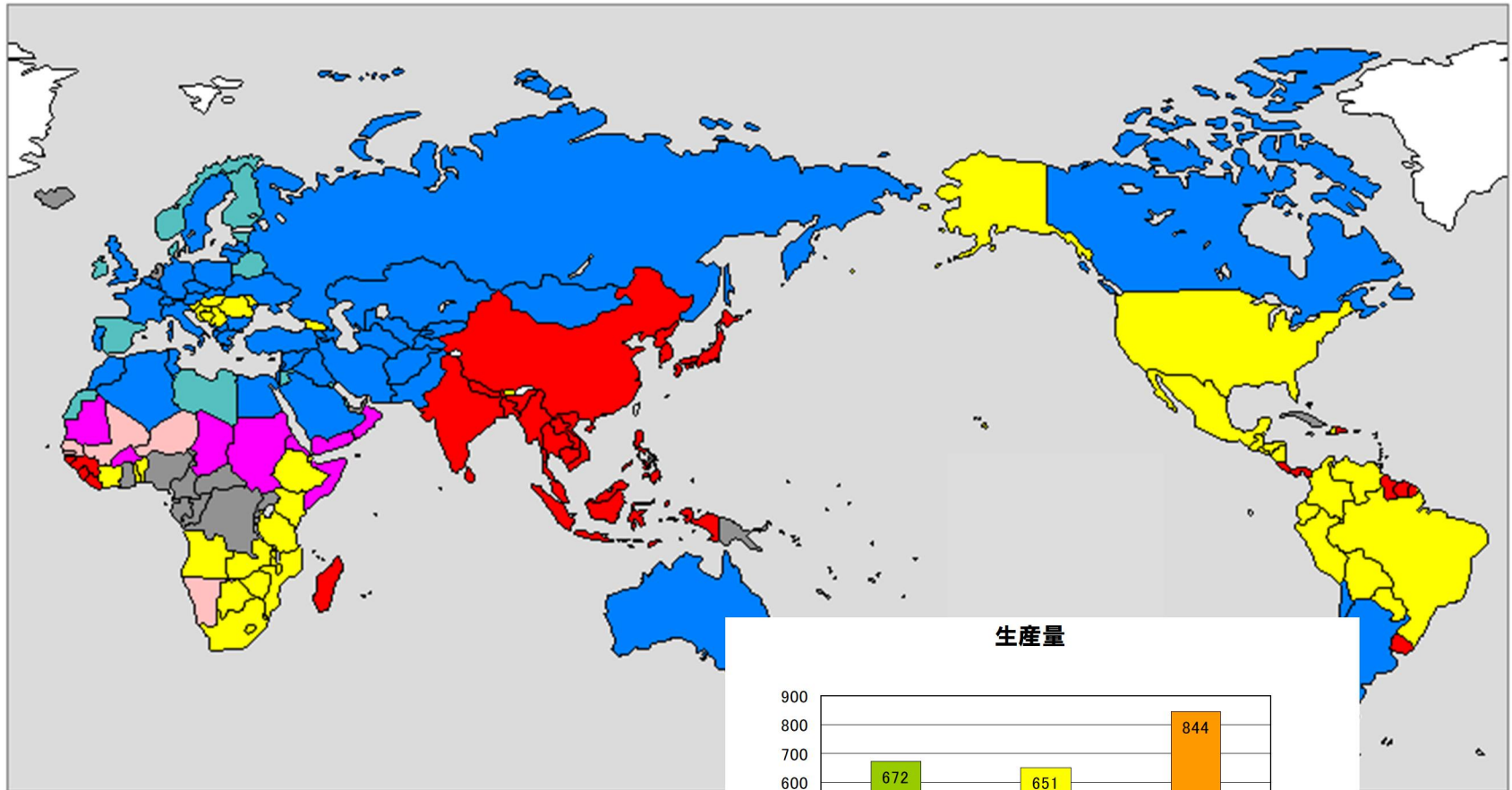


2019年_品目別食料自給率



世界各国の主たる作物

世界各国の主たる作物



なぜ日本はお米(水稻)を選んだのか？

1. 生産性が高い(収量が多い)

麦は約40倍、コメは約200倍

2. 連作障害がでない

同じ場所で行える。ヨーロッパは三圃式農業。広い面積が必要

3. 栄養価が高く、栄養のバランスにも優れている

アミノ酸スコアが高い

→ 米：65 小麦：42

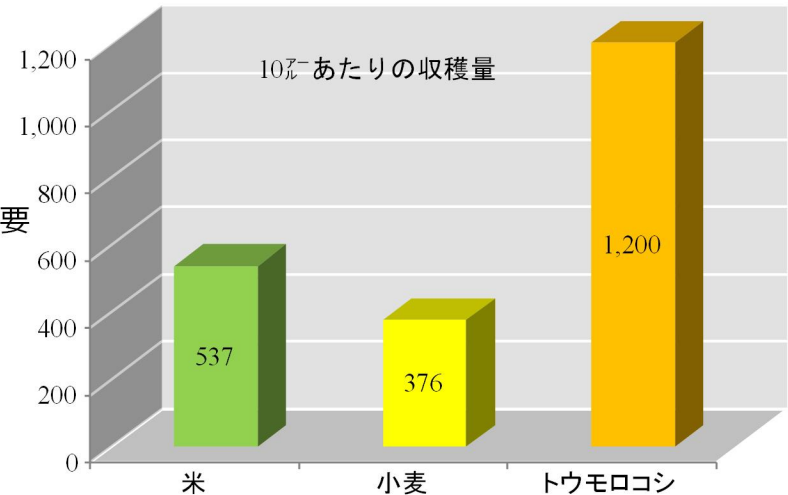
※アミノ酸スコア：食品中の必須アミノ酸の配合バランスを点数化したもの。100点に近いほど「良質なタンパク質」であることを示す。
だから、麦は肉と一緒に食べなければならない。
唯一低いのが“リジン”。このリジンを豊富に含んでいるのが大豆
ご飯に納豆、お餅にきな粉、煎餅に醤油、日本酒に冷奴

4. 長期の保存ができる

馬鈴薯も生産性の高さだけなら負けないが、保存がきかない

5. 調理が容易で“おいしい”

※小麦は米のように簡単に皮がむけない。だから粉碎してから篩にかけて皮を取り除くしかない。粉にしてからでないと食べれない



田んぼの機能

1. 洪水防止機能 : 田んぼは小さな治水ダム
地球10周分の水路、土壌の流失を防ぐ
2. 水質浄化機能 : 2割は地下に浸透していく
3. 水資源涵養機能 : 地下水や川の水の量を一定に保つ
4. 気温の緩和機能 : 水田の平均気温低下機能は 1.3°C
5. 大気の浄化機能 : 光合成により二酸化炭素を減らす
6. やすらぎ機能
7. 生物多様性の保全機能

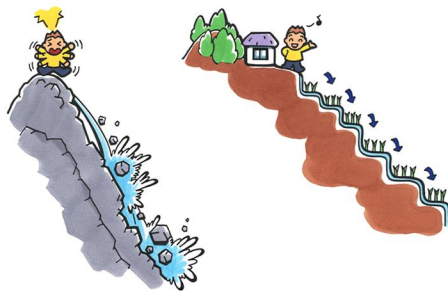
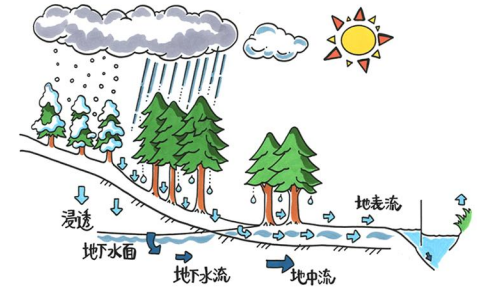
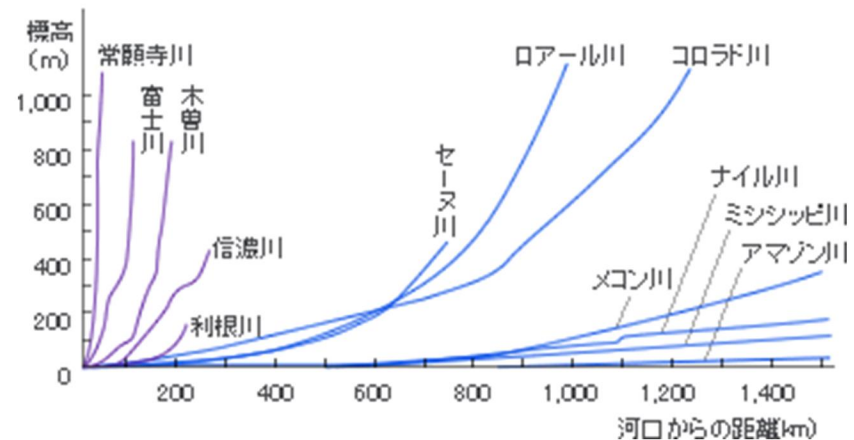


図1 日本と大陸の河川の縦断面曲線



田んぼの公益的評価額

	機能	10 a あたり	根拠
多 面 的 公 益 的 機 能	①洪水防止	87,300円	治水ダムに換算
	②水質浄化	8,700円	合併浄化槽で換算
	③水質源涵養	28,100円	利水ダムに換算・地下水の価格
	④土壌崩壊防止	1,770円	地滑り災害被害額
	⑤大気浄化	6,200円	吸着する活性炭の費用
	⑥やすらぎ	66,000円	農村への旅行費用
	⑦生物育成	66,000円	市場価格で換算
	①～⑦の合計	264,070円	
	●米の粗生産額	102,000円	12,000円×単収8.5俵

田んぼを守るために

用水周辺や道路沿いの草刈り



秋耕でメタンガスの発生抑制



大雨の際は田んぼダム



耕畜連携による堆肥散布



燐炭での二酸化炭素吸収



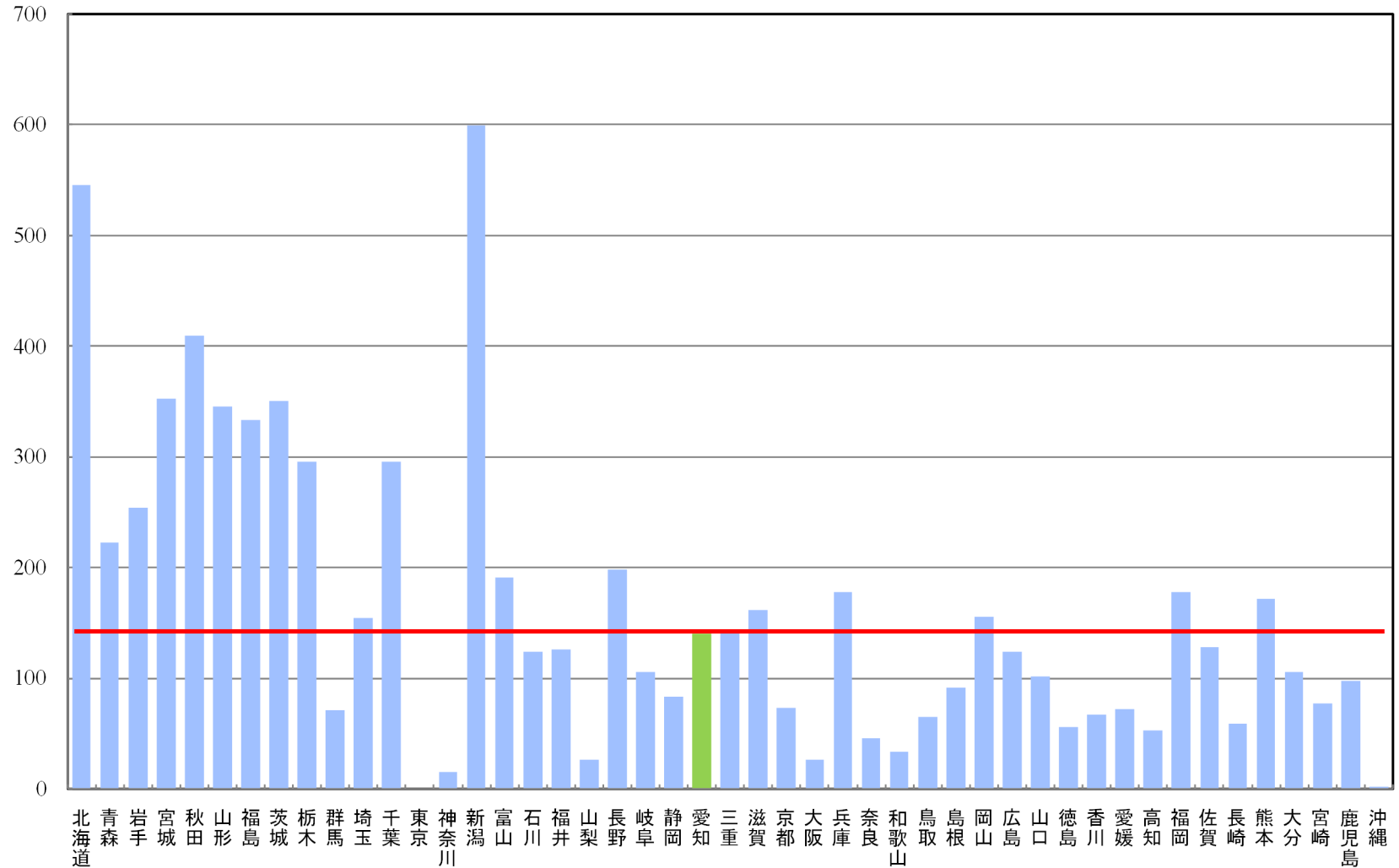
日本の文化と神社



お米は神様が作った神聖な作物として扱われてきた。
国家元首が直接田植え・稲刈りされるのは日本の天皇陛下のみ。

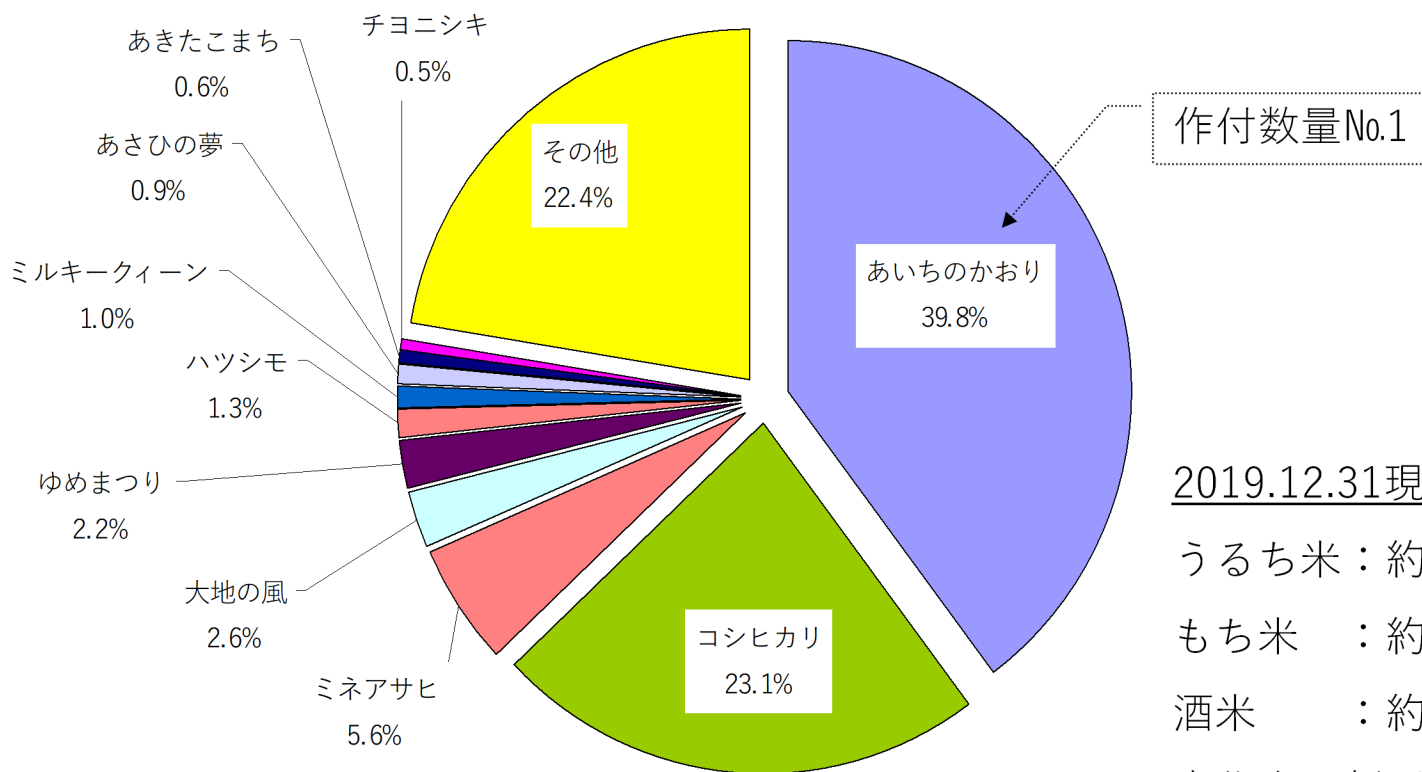
県別お米の生産量

千万トン



品種別作付比率

令和3年産 愛知県水稻品種別作付面積



作付数量No.1

2019.12.31現在 **全国900品種**

うるち米：約300

もち米：約 70

酒米：約120

古代米・新形質米・飼料用米



県産の購入調査（他県との比較）

調査目的

- 愛知県・福岡県在住20～69歳女性のお米購入実態や購入意識を聴取し、2県を比較しながらその特徴を把握する。
- また、地元の食・農に対する意識についてもデータを取得し、今後のプロモーション活動等に活用する。

調査地域

愛知県 福岡県

調査方法

WEB調査

リソース/サンプリング法

株式会社マーケティングアプリケーションズ 調査パネルを使用

調査期間

2019年 3月19日（火）～ 3月21日（木）

対象者条件

18～69歳の女性 都道府県×年代で割付

サンプル数

	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	計
愛知県	100s	100s	100s	100s	100s	500s
福岡県	100s	100s	100s	100s	100s	500s

県産の購入調査（他県との比較）

◆ お米購入時 重視点（1～3位合算）

	愛知 (n=500)		福岡 (n=500)	
1位	価格	72.8%	価格	67.8%
2位	品種ブランド	49.2%	品種ブランド	43.0%
3位	味・食感	43.4%	味・食感	41.6%
4位	有名産地であること	25.6%	生産年度	25.8%
5位	生産年度	24.2%	地元産であること	24.6%

◆ お米購入時 最重視点

	愛知 (n=500)		福岡 (n=500)	
1位	価格	32.6%	価格	27.2%
2位	味・食感	19.6%	味・食感	20.4%
3位	品種ブランド	18.6%	品種ブランド	15.6%
4位	無洗米であること	6.4%	地元産であること	7.4%
5位	有名産地/生産年度	5.2%	無洗米であること	6.8%

◆ 普段の購入お米ブランド（第1～第3想起 合算）

【愛知】



【福岡】



0% 25% 50% 75% 100%

0% 25% 50% 75% 100%

まとめ・課題提起

労働者の賃金が伸びない・あらゆる物価が上がっている

- ⇒ 消費者（労働者）が食事に使うお金が増えない
- ⇒ 食費の節約、安く済む食事が好まれる
- ⇒ お米も安い方が好まれる、食べる量が減る
- ⇒ 水稻生産者の収入が減っていく
- ⇒ 赤字で米作りが続けられなくなる
- ⇒ 水稻生産者と田んぼが減少していく
- ⇒ 輸入農産物に頼ることになる
- ⇒ 国民が食べるものに困る

愛知県民が地元の農畜産物を選択する割合が低い

- ⇒ 県内のスーパー等で県外や輸入農畜産物ばかりが販売される
- ⇒ 新鮮なものが手に入りにくい、生産者が遠く顔が見えない
- ⇒ フードマイレージが高く、地球温暖化に拍車がかかる
- ⇒ 近隣の田んぼが減少し、多面的機能が消失
- ⇒ 土砂崩れ、床下浸水、夏場の高温等の生命・生活に支障

まとめ・課題提起

地元の田んぼ、地元の農業は、誰のものでもなく
「みんなもの」



だからこそ、それはみんなで作っていくもの



地元の生活者が「つい応援したくなる」をつくる



そのために本コンテストを実施しています